

# 大学生の職業的不安に関する研究

坂 柳 恒 夫

## 目 次

- I 問題
- II 研究 1
  - 目的
  - 方法
  - 結果と考察
- III 研究 2
  - 目的
  - 方法
  - 結果と考察
- IV 全体の考察とまとめ
- 引用・参考文献



# 大学生の職業的不安に関する研究

坂 柳 恒 夫\*

## I 問題

未知で未経験な事態に遭遇し、それに対峙しなければならない時には、誰しも不安を感じるものである。とりわけ、職業選択や就職は、自己の人生（生涯）の方向にかかわる問題だけに、不安を感じるのは当然のことかもしれない。不安（anxiety）は、哲学・心理学・社会学・精神医学などの人間に関する諸科学において、しばしば使用されている用語である。都留（1981）によれば、不安とは「自己の将来に起こりそうな危険や苦痛の可能性を感じて生じる不快な情動現象」と定義されているように、不安は将来の不適応事態への可能性予期と警告サインであるとも解される。

これまでの不安の測定・評価に関する研究を概観すると、一般不安に関する研究と、特定の事態における不安の研究に大別できる（曾我，1993）。一般不安の測定についてみると、MAS（Manifest Anxiety Scale：顕現性不安尺度）の発表以来、種々の不安検査が作成されている。さらに、STAI（State - Trait Anxiety Inventory：状態-特性不安尺度）に代表されるように、不安を多次元的に測定するアプローチもなされている。一方、特定の事態における不安の研究では、テスト不安、対人不安、コンピュータ不安などを測定する尺度が作成されている（堀・山本・松井，1994）。しかし、職業選択や就職問題から生じる職業的不安そのものを測定する尺度の作成は、不十分な状況にあるといえる。従来の進路指導（職業指導）の研究領域においては、Crites（1969）が職業の不決断（indecision）と不安の関係を論じて以後、不決断と一般不安（特に、状態不安と特性不安）との関連性が問題にされてきた（清水；1983，1989）。最近、古市（1995）は、就職に対する不安の程度を測定する「就業不安尺度」（4項目）を作成し、職業忌避的傾向に関する研究において使用している。

ところで、大学生の職業的不安を問題にする背景の1つには、現代の大学生にみられる職業キャリアの未成熟現象があげられる（有本・近藤，1991）。大学生の現状をみると、吉谷（1990）が指摘しているように、これまでの中学校から高等学校、さらに大学に至る進路選択の過程において、職業や生き方の問題とのかかわりが必ずしも十分でない環境のなかで育ったこともあり、職業や生き方の問題に対峙したときに支障をきたすものも少なくない。坂柳（1991）は、高校生（進学希望の生徒）の進路（キャリア）成熟に関する縦断的研究を行い、進学レディネスを中核とした教育キャリア成熟度の進行状況（速度）と比較して、職業キャリアと人生キャリアの両成熟度に遅滞がみられることを報告している。この結果は、現実的には、将来の職業であるとか、これからの生き方といった、直接には進学にリンクしない進路問題は、高等教育段階まで先延ばししてしまう状況を示

\*愛知教育大学助教授（大学教育研究センター客員研究員）

しているものであるといえる。このことにも関連するが、下山（1985, 1986）は、進路指導が進学指導に重点を置いているために、大学入学後には無気力になると指摘し、職業決定に困難を訴える大学生に対するカウンセリングの必要性から職業未決定尺度を作成している。また、職業知識は職業選択の根幹をなす重要なものであるが、坂柳・後藤（1994）の大学生を対象とした職業知識に関する調査によれば、職業知識の乏しい大学生が相当数みられる。特に、内容までは知らないが「名前だけ知っている」という職業がかなり多くみられている。

職業的不安を問題にするもう1つの背景として、近年の厳しい就職状況があげられる。長引く不況から新規学卒者の就職をめぐる状況は、非常に厳しいことがマスコミなどで報じられている。就職状況の厳しさは、大学生の職業的不安を高揚させていると考えられる。すなわち、職業選択や就職の問題にどのように対処していけばよいのか、不安感を強めている大学生が多いと推察される。

大学生のこうした状況や背景を考慮すると、大学生の職業的不安の実態やその特質を検討することは、高等教育段階における進路指導のあり方を考える上で、重要な課題といえる。本研究は、研究1と研究2の2つからなり、研究1では職業的不安の尺度（質問紙）を作成し、尺度の信頼性および妥当性を検討することを目的とする。研究2では、その尺度を適用し、①職業的不安の性差・学年差を検討すること、および②職業的不安と大学進路指導への要望度との関連を明らかにすることを目的とする。

## II 研究1

### 目的

職業的不安尺度（Occupational Anxiety Scale:略称 OAS）の信頼性および妥当性を検討する。尺度の信頼性は内的整合性と安定性の観点から、妥当性については下位尺度間の関連性を検討する。

### 方法

#### 1. 職業的不安尺度の内容

##### (1) 定義と領域の設定

本研究では、職業的不安とは「職業選択やその後の適応をめぐる職業キャリアの問題から生じる気がかりである」と暫定的に定義し、人格病理的な不安とは区別した。すなわち、健康範囲内の職業的不安に焦点を置き、それを認知的・意識的レベルで測定するための尺度の作成を試みた。職業的不安の尺度作成にあたっては、単に職業的不安の高低ないし強弱だけでなく、どのような性質の不安であるかも把握できるものであることが必要であると考えた。そこで、進路指導の活動領域にほぼ対応させて、職業的不安の内容領域を設定した。その内容領域は、次のとおりである。

- ① 自己理解不安：自己理解の不足や曖昧さに起因する不安
- ② 職業情報不安：職業選択や就職に関する情報の不足に起因する不安
- ③ 経験欠如不安：職業的な経験の不足に起因する不安
- ④ 相談欠如不安：相談の欠如に起因する不安

⑤ 選択決定不安：職業の選択・決定に起因する不安

⑥ 職業適応不安：就職後の適応に関する不安

(2) 回答の選択肢

職業的不安の測定尺度の項目内容を、表 1 に示した。尺度は、各項目とも「5：よくあてはまる」、「4：ややあてはまる」、「3：どちらともいえない」、「2：あまりあてはまらない」、「1：全くあてはまらない」という 5 段階評定法を用い、5 点から 1 点までの得点（逆転項目は 1 点から 5 点の得点）が与えられ、各領域の職業的不安（下位尺度）の合計得点が算出されるようになっている。したがって、各下位尺度の得点範囲は、5～25 点に分布し、中間点は 15 点となっている。この得点が高いほど、当該領域の職業的不安感が高いことを意味している。

表 1 職業的不安尺度の領域と項目

(R：逆転項目)

＜自己理解に関する不安＞

- R 1. 自分自身のことはよくわかっているのに、それほど不安を感じていない。
- 7. 希望する職業に自分は向いているのかどうか、不安である。
- 13. 自分の能力がどのような職業に向いているのかわからないので、不安を感じる。
- 19. 自分はどの職業にも興味を持たないような気がして、心配である。
- 25. 自分の短所ばかり気になるので、就職に不安を感じる。

＜職業情報に関する不安＞

- 2. 職業選択や就職に関する正確で新しい情報が足りないのに、不安を感じる。
- R 8. 就職先を決める資料・情報はかなり持っているのに、特に不安は感じない。
- 14. 就職試験がどのように行われるのか、はっきりわからないので不安である。
- 20. 他の方が自分よりも就職について詳しいと不安になる。
- 26. 就職や職業生活に関する知識がまだ乏しいので、不安を感じる。

＜経験欠如に関する不安＞

- 3. 労働経験があまりないので、職業選択に不安を感じる。
- 9. 今の自分では就職しても仕事をこなすだけの力がないので心配になる。
- R 15. これまでに働く経験をしており、働くことそれ自体については心配がない。
- 21. 職業選択に役立つ経験をしたことがないので、就職に不安を感じる。
- 27. 職場の状況を実際に見たことがないので、心配である。

＜相談欠如に関する不安＞

- 4. 将来の職業について率直に相談できる人があまりいないので不安である。
- 10. 就職や職業のことで、他の人と相談する機会が少ないので不安である。
- 16. 就職や職業の悩みはあまり他の人に話さないのに、不安を感じる。
- R 22. 就職ではいろいろな人に相談にのってもらっており、あまり不安は感じない。
- 28. 職業選択に関して、今まで他の人と十分に話し合っていないので不安である。

＜選択決定に関する不安＞

- 5. どのようにして職業を決めればよいのかわからないので不安である。
- 11. 希望する職業はあるが、これが最良なのかどうか不安を感じる。
- 17. 社会変化や景気変動が希望職種に大きな影響を与えるのではないかと心配だ。
- 23. 自分は就職できないのではないかと心配になる。
- R 29. 職業選択は十分考えたうえで行っており、あまり気にならない。

＜職業適応に関する不安＞

- R 6. 就職後の生活には、あまり不安を感じていない。
- 12. 職業に就いた後、自分を十分に生かすことができるかどうか心配である。
- 18. 就職してもうまくいかないことがありそうで、それを考えると不安になる。
- 24. 職場の人間関係は気をつかうので、不安である。
- 30. 就職しても、長く雇ってもらえるかどうかかわからないので、不安である。

## 2. 調査の対象・時期

本調査は、1994（平成6）年6月上旬から中旬にかけて、愛知県内にある国立大学・私立大学の1年生から4年生までの男女を対象に実施した。以後の分析において対象となった数は、表2に示すように、男子262名、女子198名の計460名であった。大学生は、1年生から4年生まですべて含んでいたが、相対的には1年生と2年生の数が少なくなっていた。そのため、学年別の分析では、1年生と2年生は合併して、1・2年生としてグループ化した。

表2 調査対象者の内訳

	1年	2年	3年	4年	計
男子	14	23	140	85	262
女子	28	9	92	69	198
計	42	32	232	154	460

また、他に再検査による安定性（信頼性）を検証するため、大学生141名を対象にして、3週間の間隔において2回の調査が実施された。

## 結果と考察

### 1. 職業的不安尺度（OAS）の内的整合性の検討

#### (1) 項目水準での検討

最初に、構成されたOASの内的整合性（等質性）を検討することにする。表3は、各下位尺度得点と尺度に含まれる項目得点との相関係数、および各項目の平均と標準偏差を示したものである。

分析対象者全体についてみると、自己理解不安尺度では、.403～.670、職業情報不安尺度では、.468～.673、経験欠如不安尺度では、.522～.641、相談欠如不安尺度では、.554～.772、選択決定不安尺度では、.363～.579、職業適応不安尺度では、.423～.719となっており、すべてプラスの有意に高い相関係数が得られた。次に、性別の結果をみると、項目－全体（尺度）相関は、全般的には、男子の方が女子よりも高くなっている。女子の下位尺度項目の一部に低い数値（.287）がみられたが（0.1%で有意）、全体的には受容できる水準にあると判断できる。

また、OASの各項目得点の平均は、全体では、2.15～3.77、男子では、2.14～3.73、女子では、2.17～3.84、となっており、すべて2.00～4.00の範囲内に分布している。このことは、OASの各項目の難易度が適切であることを示している。

なお、OAS 6尺度総計30項目について、主成分分析を行ったところ、対象者全体では第1主成分の負荷量は、.465（項目番号17）～.759（項目番号26）と、すべての項目において高い値が得られ、1次元性が認められた。したがって、OASは、単一の総合尺度として構成することも可能であることが確認された。

表3 職業的不安尺度(OAS)における項目得点と下位尺度得点との相関係数および各項目の平均と標準偏差

下位尺度と 構成項目番号		全体 (N=460)			男子 (N=262)			女子 (N=198)		
		I-T相関	平均	S D	I-T相関	平均	S D	I-T相関	平均	S D
自己理解不安	R 1	.430	3.37	1.04	.465	3.30	1.10	.353	3.45	0.97
	7	.606	3.15	1.16	.608	3.03	1.22	.588	3.31	1.05
	13	.670	2.94	1.15	.702	2.80	1.21	.597	3.12	1.05
	19	.403	2.15	1.07	.443	2.14	1.17	.329	2.17	0.92
	25	.556	2.75	1.15	.571	2.66	1.19	.519	2.87	1.08
職業情報不安	2	.540	3.42	1.08	.583	3.38	1.10	.472	3.47	1.06
	R 2	.512	3.77	0.95	.527	3.73	1.02	.476	3.84	0.85
	14	.593	3.21	1.25	.640	3.09	1.29	.495	3.36	1.17
	20	.468	2.77	1.21	.539	2.61	1.23	.310	2.97	1.06
	26	.673	3.30	1.13	.709	3.20	1.19	.596	3.42	1.04
経験欠如不安	3	.635	3.03	1.14	.668	2.97	1.22	.565	3.11	1.03
	9	.522	3.15	1.18	.611	2.99	1.25	.331	3.35	1.05
	R 15	.528	3.06	1.19	.560	2.89	1.25	.450	3.29	1.07
	21	.641	2.75	1.11	.684	2.73	1.19	.563	2.77	0.99
	27	.556	3.00	1.23	.646	2.96	1.25	.402	3.06	1.20
相談欠如不安	4	.745	2.76	1.15	.766	2.78	1.23	.706	2.73	1.05
	10	.772	2.78	1.08	.777	2.82	1.15	.765	2.71	0.97
	16	.685	2.56	1.03	.696	2.58	1.09	.664	2.55	0.93
	R 22	.554	3.35	0.98	.561	3.33	1.05	.544	3.37	0.88
	28	.633	2.73	1.08	.667	2.75	1.14	.573	2.70	1.01
選択決定不安	5	.579	2.82	1.20	.614	2.77	1.26	.517	2.87	1.12
	11	.458	3.12	1.15	.544	2.97	1.19	.287	3.31	1.08
	17	.363	3.53	1.25	.390	3.42	1.36	.287	3.68	1.07
	23	.485	3.17	1.27	.523	3.07	1.32	.400	3.30	1.19
	R 29	.421	3.14	1.06	.426	3.10	1.11	.409	3.19	1.00
職業適応不安	R 6	.488	3.17	1.15	.507	3.08	1.21	.436	3.29	1.05
	12	.575	3.23	1.14	.661	3.13	1.24	.383	3.36	0.99
	18	.719	3.05	1.15	.722	2.94	1.23	.701	3.20	1.03
	24	.524	3.07	1.18	.572	2.92	1.24	.403	3.26	1.07
	30	.423	2.55	1.14	.447	2.44	1.19	.350	2.69	1.04

(注1) Rは、逆転項目を示している。

(注2) 相関係数は、すべて $P < .001$ で有意である。

## (2) 尺度水準での検討

次に、OASの内的整合性を尺度水準で検討するために、Cronbachの標準化された $\alpha$ 係数を求めた。結果は、表4に示すとおりである。

表4 職業的不安尺度 (OAS) の内的整合性 ( $\alpha$  係数)

	全 体	男 子	女 子
自 己 理 解 不 安	.760	.780	.712
職 業 情 報 不 安	.781	.811	.711
経 験 欠 如 不 安	.796	.834	.706
相 談 欠 如 不 安	.859	.867	.843
選 択 決 定 不 安	.704	.736	.624
職 業 適 応 不 安	.772	.797	.695
総 合	.945	.953	.923

まず、対象者全体では、.704 (選択決定不安) ~ .859 (相談欠如不安)、男子では .736 (選択決定不安) ~ .867 (相談欠如不安)、女子では .624 (選択決定不安) ~ .843 (相談欠如不安)、と、ほぼ満足すべき  $\alpha$  係数が得られた。また、OAS の総合尺度 (30項目の合計) では、全体 .945、男子 .953、女子 .923 となっており、十分に高い信頼性係数が得られた。

以上の結果から、OAS を構成している下位尺度は、内的整合性の観点より、一貫した内容を備えており、信頼性の高い尺度であるといえる。

## 2. 職業的不安尺度 (OAS) の安定性の検討

OAS の安定性 (信頼性) を再検査法によって検討する。表5は、OAS の下位尺度および総合尺度ごとに、1回目時、2回目時各々の平均得点、標準偏差、そして、1回目と2回目との間の得点の安定性係数を示したものである。再検査法によって安定性を検討する場合、着目すべき点は次の2点になる。まず第1点は安定性係数の指標としての相関係数である。相関係数が高いということは、1回目に高得点であった者は2回目にも高得点であり、1回目に低得点であった者は2回目にも低得点であることを示し、相関係数が高ければ、その尺度の安定性 (信頼性) が高いということになる。第2点は分布の型、とりわけ標準偏差についてである。標準偏差に変化がみられないということは、たとえ平均得点に変化していても、分布が平行移動していることを示し、標準偏差の変化が小さく、相関係数が高ければ分布に変化がほとんどない、換言すれば安定性が高いと判断される。

表5 職業的不安尺度 (OAS) の安定性 (再検査信頼性)

(N=141)

	1 回目		2 回目		安定性 r
	平均	S D	平均	S D	
自 己 理 解 不 安	14.67	4.31	14.06	4.43	.832
職 業 情 報 不 安	17.08	4.31	16.03	4.73	.817
経 験 欠 如 不 安	15.30	4.85	14.76	4.64	.811
相 談 欠 如 不 安	14.57	4.77	14.46	4.65	.733
選 択 決 定 不 安	16.58	4.34	15.89	4.47	.826
職 業 適 応 不 安	15.31	4.59	14.74	4.76	.809
総 合	93.52	22.84	89.94	24.66	.889



さて表5をみると、OASを構成している下位尺度は、いずれも高い安定性係数を示している。また、各下位尺度および総合尺度における2回の平均得点は、3週間の間隔ということもあり、やや減少傾向が認められるものの、標準偏差はほぼ近似している。

このことから、OASの安定性は十分に高いことが確認されたといえる。

### 3. OASの下位尺度間の関係構造

OASの構成概念妥当性の一端を確認するため、OASの下位尺度間の相関係数を算出した。結果は、表6に示したとおりである。

表6 職業的不安尺度(OAS)における下位尺度間の相関係数

		平均	S D	A <sub>1</sub>	A <sub>2</sub>	A <sub>3</sub>	A <sub>4</sub>	A <sub>5</sub>
全 体 (N=460)	A <sub>1</sub> 自己理解不安	14.36	4.00					
	A <sub>2</sub> 職業情報不安	16.46	4.12	.645				
	A <sub>3</sub> 経験欠如不安	14.98	4.34	.684	.679			
	A <sub>4</sub> 相談欠如不安	14.17	4.26	.617	.659	.656		
	A <sub>5</sub> 選択決定不安	15.78	4.02	.728	.760	.655	.636	
	A <sub>6</sub> 職業適応不安	15.06	4.17	.686	.636	.718	.582	.680
男 子 (N=262)	A <sub>1</sub> 自己理解不安	13.94	4.31					
	A <sub>2</sub> 職業情報不安	16.01	4.46	.666				
	A <sub>3</sub> 経験欠如不安	14.53	4.77	.728	.703			
	A <sub>4</sub> 相談欠如不安	14.26	4.59	.678	.712	.695		
	A <sub>5</sub> 選択決定不安	15.34	4.35	.748	.788	.677	.690	
	A <sub>6</sub> 職業適応不安	14.50	4.55	.711	.667	.758	.639	.717
女 子 (N=198)	A <sub>1</sub> 自己理解不安	14.91	3.48					
	A <sub>2</sub> 職業情報不安	17.07	3.53	.585				
	A <sub>3</sub> 経験欠如不安	15.58	3.61	.575	.610			
	A <sub>4</sub> 相談欠如不安	14.06	3.81	.518	.577	.600		
	A <sub>5</sub> 選択決定不安	16.36	3.46	.673	.691	.589	.554	
	A <sub>6</sub> 職業適応不安	15.81	3.48	.614	.544	.610	.498	.582

(注) 相関係数は、すべて $P < .001$ で有意である。

同表から明らかのように、すべての組合せにおいて有意な高いプラス相関が認められる。分析対象者全体では.582~.760、男子では.639~.788、女子では.498~.691、となっている。このように、OASの下位尺度間の結びつきは、全体的には強いものといえる。とりわけ、職業情報不安と選択決定不安の間には、かなり強い結びつきが認められる。また、性別でみると、男子の下位尺度間の相互相関は女子のそれよりも、より強くなっている。

### III 研究2

#### 目的

研究1で作成・検討された職業的不安尺度を適用し、①職業的不安の性差・学年差を検討すること、および②職業的不安と大学進路指導への要望度との関連を明らかにすることを目的とする。

#### 方法

##### 1. 調査の内容

###### (1) 職業的不安尺度

研究1で検討した職業的不安尺度(OAS)を使用した。

###### (2) 大学進路指導への要望度調査

大学生が、高等教育段階(大学)において、どのような進路指導をどの程度望んでいるのかを、調査した。調査の内容は、次の5項目である。

- ① 自己理解に役立つ検査やその指導(略称:CG1)
- ② 就職や進路に関する種々の情報提供(略称:CG2)
- ③ 職業的経験に関する機会の提供(略称:CG3)
- ④ 就職や進路に関するカウンセリング(略称:CG4)
- ⑤ 人生設計や生き方に関する指導(略称:CG5)

各項目とも、当該の指導を受けたい程度を、「4:よくあてはまる」、「3:ややあてはまる」、「2:あまりあてはまらない」、「1:全くあてはまらない」という4段階評定法を用い、4点から1点までの得点を与えた。したがって、要望度の間接点は、2.50となっている。

##### 2. 調査の対象・時期

研究1と同様の大学生460名であった。

#### 結果と考察

##### 1. 職業的不安の性別・学年別傾向

表7は、職業的不安の領域別平均得点と標準偏差を、性別・学年別に示したものである。また、図1は、同表の結果をもとに、グラフ化したものである。以下、職業的不安の領域ごとに、特徴的な傾向を整理してみることにする。

表7 職業的不安の性別・学年別平均得点および標準偏差

## (1) 自己理解不安

	1・2年	3年	4年	学年差		
	平均 SD	平均 SD	平均 SD	1・2-3年	1・2-4年	3-4年
男子	13.57(4.51)	14.90(3.98)	12.51(4.36)	t = 1.76 †	n s	t = 4.22***
女子	15.41(3.84)	14.97(3.27)	14.58(3.57)	n s	n s	n s
性差	t = 1.89 †	n s	t = 3.18 **			

(注) \*\*\* p &lt; .001, \*\* p &lt; .01, † p &lt; .10, n s 有意差なし

## (2) 職業情報不安

	1・2年	3年	4年	学年差		
	平均 SD	平均 SD	平均 SD	1・2-3年	1・2-4年	3-4年
男子	16.14(4.11)	17.05(4.20)	14.24(4.52)	n s	t = 2.19 *	t = 4.73***
女子	17.32(3.88)	17.59(3.40)	16.23(3.41)	n s	n s	t = 2.50 *
性差	n s	n s	t = 3.03 **			

(注) \*\*\* p &lt; .001, \*\* p &lt; .01, \* p &lt; .05, n s 有意差なし

## (3) 経験欠如不安

	1・2年	3年	4年	学年差		
	平均 SD	平均 SD	平均 SD	1・2-3年	1・2-4年	3-4年
男子	14.95(5.14)	15.60(4.38)	12.60(4.69)	n s	t = 2.47 *	t = 4.85***
女子	16.59(3.38)	15.89(3.63)	14.61(3.52)	n s	t = 2.81 **	t = 2.25 *
性差	n s	n s	t = 2.95 **			

(注) \*\*\* p &lt; .001, \*\* p &lt; .01, \* p &lt; .05, n s 有意差なし

## (4) 相談欠如不安

	1・2年	3年	4年	学年差		
	平均 SD	平均 SD	平均 SD	1・2-3年	1・2-4年	3-4年
男子	14.84(4.57)	15.19(4.30)	12.49(4.59)	n s	t = 2.60 *	t = 4.44***
女子	13.97(4.34)	14.61(3.77)	13.36(3.49)	n s	n s	t = 2.14 *
性差	n s	n s	n s			

(注) \*\*\* p &lt; .001, \* p &lt; .05, n s 有意差なし

## (5) 選択決定不安

	1・2年	3年	4年	学年差		
	平均 SD	平均 SD	平均 SD	1・2-3年	1・2-4年	3-4年
男子	14.65(3.99)	16.26(4.27)	14.13(4.34)	t = 2.07 *	n s	t = 3.60***
女子	16.49(3.49)	16.85(3.24)	15.64(3.64)	n s	n s	t = 2.22 *
性差	t = 2.11 *	n s	t = 2.30 *			

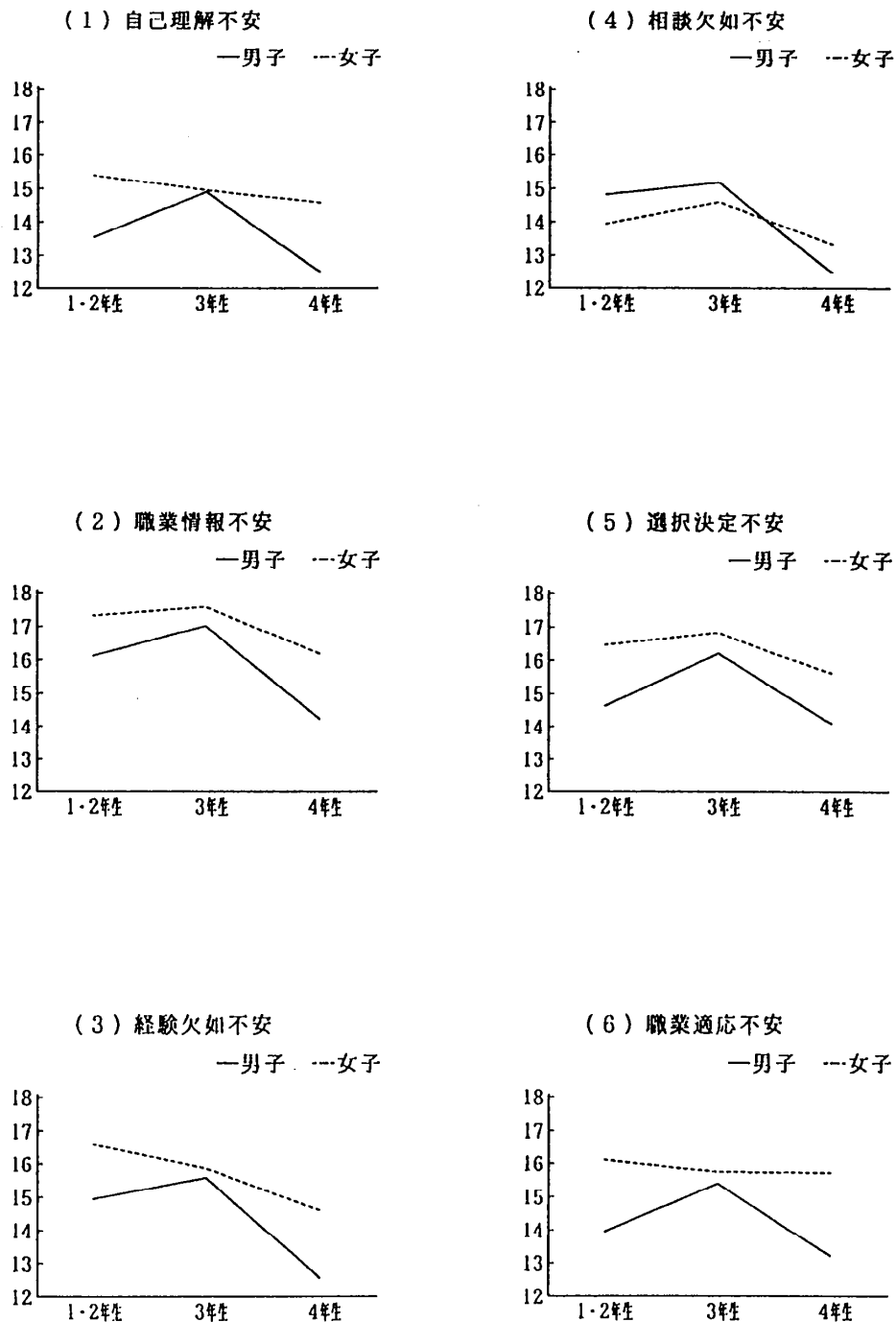
(注) \*\*\* p &lt; .001, \* p &lt; .05, n s 有意差なし

(6) 職業適応不安

	1・2年	3年	4年	学年差		
	平均 SD	平均 SD	平均 SD	1・2-3年	1・2-4年	3-4年
男子	13.95(4.33)	15.42(4.44)	13.22(4.52)	t = 1.81 †	n s	t = 3.57***
女子	16.11(3.39)	15.75(3.45)	15.72(3.61)	n s	n s	n s
性差	t = 2.39 *	n s	t = 3.73***			

(注) \*\*\* p < .001, \* p < .05, † p < .10, n s 有意差なし

図1 職業的不安の発達的变化(性別)



### ① 自己理解不安

自己理解不安を従属変数として、性・学年の2要因による分散分析を行った結果、性の主効果 ( $F=7.99$ ,  $P<.01$ ), 学年の主効果 ( $F=7.26$ ,  $P<.001$ ), 性・学年の交互作用 ( $F=3.45$ ,  $P<.05$ )のすべてが有意であった。さらに、個別にt検定をしたところ、4年生に男女差が認められ、自己理解に関する不安は男子の方が低くなっていた。また、女子では学年による違いはみられなかったが、男子では3年生と4年生との間に有意差がみられ、4年生の自己理解不安が低くなっていた。

以上の結果から、自己理解に関する不安は、男子では3年生から4年生にかけて減少しているが、女子では学年による顕著な変化は認められないといえる。

### ② 職業情報不安

職業情報不安について、性・学年の2要因による分散分析を行ったところ、性の主効果 ( $F=9.24$ ,  $P<.01$ )と学年の主効果 ( $F=14.17$ ,  $P<.001$ )が有意であった。個別のt検定の結果、性差は4年生の男女間でみられ、女子の職業情報不安が男子より高い。また、学年差をみると、男子では卒業学年(4年生)よりも非卒業学年(1・2・3年生)の職業情報不安が高くなっている。女子では3年生と4年生との間に有意差がみられ、3年生の職業情報不安が卒業学年(4年生)よりも顕著に高くなっている。

このことから、職業情報に関する不安は、男女とも、卒業学年よりも非卒業学年、とりわけ3年生において高いといえる。

### ③ 経験欠如不安

経験欠如不安を従属変数として、性・学年の2要因による分散分析を行った結果、性の主効果 ( $F=7.76$ ,  $P<.01$ )と学年の主効果 ( $F=14.97$ ,  $P<.001$ )が有意であった。さらに、個別にt検定をしたところ、4年生の男女間で差がみられ、男子の経験欠如不安は女子よりも低い。また、学年差をみると、男女いずれも、卒業学年と比較して、非卒業学年の経験欠如不安が高い。

以上の結果より、非卒業学年から卒業学年に移行すると、経験欠如に関する不安は減少傾向を示し、特に男子にその傾向が強いといえる。

### ④ 相談欠如不安

相談欠如不安について、性・学年の2要因による分散分析を行ったところ、学年の主効果 ( $F=11.51$ ,  $P<.001$ )のみが有意であった。個別のt検定の結果、男子では卒業学年(4年)よりも非卒業学年の相談欠如不安が高くなっている。女子では3年生と4年生との間に有意差がみられ、3年生の相談欠如不安が卒業学年(4年)よりも高くなっている。

この結果から、相談欠如に関する不安は、総じて非卒業学年の方が高いといえる。

### ⑤ 選択決定不安

選択決定不安を従属変数として、性・学年の2要因による分散分析を行った結果、性の主効果 ( $F=8.96$ ,  $P<.01$ )と学年の主効果 ( $F=9.36$ ,  $P<.001$ )が有意であった。下位(t)検定の結果、3年生を除く学年において性差がみられ、女子の選択決定不安は男子より高い。また、学年差をみると、男子では、3年生をピークとした逆V字型を示した。女子では、卒業学年と比

較すると、3年生における選択決定不安が高い。

以上のことから、選択決定に関する不安は、卒業学年の学生よりも、むしろ3年生において高いといえる。

#### ⑥ 職業適応不安

職業適応不安について、性・学年の2要因による分散分析を行ったところ、性の主効果 ( $F = 12.70, p < .001$ )、学年の主効果 ( $F = 4.60, p < .05$ )、性・学年の交互作用 ( $F = 3.45, p < .05$ ) のすべてが有意であった。さらに、下位検定の結果、1・2年生および4年生で性差が認められ、女子の職業適応不安は男子よりも高くなっている。また、学年差においては、男子が3年生をピークとした逆V字型を示したのに対して、女子は学年による一貫した傾向は認められなかった。

以上のことから、職業適応不安に関する発達的变化は、男子の場合には3年生をピークとした逆V字型を示したが、女子では学年を通しての顕著な変化はないといえる。

## 2. 職業的不安と大学進路指導への要望度との関連

### (1) 大学進路指導への要望度

職業的不安と大学進路指導への要望度との関連を検討する前に、大学生が要望している進路指導の内容とその程度について、分析してみよう。表8は、大学進路指導に対する大学生の要望度得点を、性別・学年別に示したものである。以下、項目ごとに特徴的な点を中心にみていくことにする。

表8 大学進路指導への要望度の性別・学年別平均得点および標準偏差

#### (1) 自己理解に役立つ検査やその指導

	1・2年	3年	4年	学年差		
	平均 SD	平均 SD	平均 SD	1・2-3年	1・2-4年	3-4年
男子	2.89(0.99)	3.05(0.97)	2.85(1.03)	n s	n s	n s
女子	3.19(0.81)	2.93(0.87)	3.06(0.84)	n s	n s	n s
性差	n s	n s	n s			

(注) n s 有意差なし

#### (2) 就職や進路に関する種々の情報提供

	1・2年	3年	4年	学年差		
	平均 SD	平均 SD	平均 SD	1・2-3年	1・2-4年	3-4年
男子	3.27(0.84)	3.44(0.77)	3.21(0.85)	n s	n s	t = 2.10 *
女子	3.57(0.65)	3.74(0.59)	3.46(0.63)	n s	n s	t = 2.84 **
性差	t = 1.71 †	t = 3.13 **	t = 2.05 *			

(注) \*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$ , †  $p < .10$ , n s 有意差なし

## (3) 職業的経験に関する機会の提供

	1・2年	3年	4年	学年差		
	平均 SD	平均 SD	平均 SD	1・2-3年	1・2-4年	3-4年
男子	3.08(0.92)	3.11(0.87)	3.06(0.93)	n s	n s	n s
女子	3.38(0.64)	3.37(0.72)	3.33(0.70)	n s	n s	n s
性差	n s	t = 2.40 *	t = 2.03 *			

(注) \*  $p < .05$ , n s 有意差なし

## (4) 就職や進路に関するカウンセリング

	1・2年	3年	4年	学年差		
	平均 SD	平均 SD	平均 SD	1・2-3年	1・2-4年	3-4年
男子	2.75(0.97)	2.79(0.92)	2.65(0.88)	n s	n s	n s
女子	2.89(0.74)	3.12(0.84)	2.87(0.90)	n s	n s	t = 1.83 †
性差	n s	t = 2.80 **	n s			

(注) \*\*  $p < .01$ , †  $p < .10$ , n s 有意差なし

## (5) 人生設計や生き方に関する指導

	1・2年	3年	4年	学年差		
	平均 SD	平均 SD	平均 SD	1・2-3年	1・2-4年	3-4年
男子	2.43(1.02)	2.49(0.98)	2.29(0.88)	n s	n s	n s
女子	2.76(0.93)	2.39(0.89)	2.66(0.87)	t = 2.09 *	n s	t = 1.92 †
性差	t = 2.11 *	n s	t = 2.57 *			

(注) \*  $p < .05$ , †  $p < .10$ , n s 有意差なし

## ① 自己理解に役立つ検査やその指導

自己理解に役立つ検査やその指導に対しての要望度には、性・学年による差異はみられない。対象者全体の平均得点が2.99であることから判断すれば、性・学年に関わりなく、自己理解に関する検査やその指導を望んでいる学生が多いといえる。

## ② 就職や進路に関する種々の情報提供

性・学年の2要因による分散分析を行ったところ、性の主効果 ( $F = 17.22$ ,  $p < .001$ ) と学年の主効果 ( $F = 5.65$ ,  $p < .01$ ) が有意であった。そこで、下位検定をした結果、男女とも、3年生と4年生との間に差がみられ、3年生の要望度がより高い。また、性差については、女子の要望度の方が、男子よりも高くなっている。

## ③ 職業的経験に関する機会の提供

職業的経験に関する機会の提供を従属変数として、性・学年の2要因による分散分析を行った結果、性の主効果 ( $F = 12.56$ ,  $p < .001$ ) のみ有意であった。1・2年生では性差がみられなかったが、3・4年生の男女間に差がみられた。すなわち、職業的経験に関する機会の提供は、男子よりも女子の方が強く求めているといえる。

## ④ 就職や進路に関するカウンセリング

就職や進路に関するカウンセリングについて、性・学年の2要因による分散分析を行ったところ、性の主効果 ( $F=9.97, p<.01$ ) のみが有意であった。下位検定の結果、3年生の男女間で統計的な有意差が認められた。すなわち、就職や進路に関するカウンセリングを要望している学生は、男子より女子の方が多くなっている。

## ⑤ 人生設計や生き方に関する指導

人生設計や生き方に関する指導を従属変数として、性・学年の2要因による分散分析を行った結果、性と学年の交互作用のみ ( $F=3.21, p<.05$ ) が有意であった。下位検定の結果、男子では、学年による違いはみられないが、女子では、1・2年と4年の要望度が高く、3年の要望度が低いという、V字型の変化を示している。また、1・2年および4年の女子は同学年の男子より、要望度得点が高くなっている。

## (2) 職業的不安と大学進路指導への要望との関連

最後に、これまでみてきた大学生の職業的不安が、大学進路指導への要望度とどのような関係にあるのかを検討してみる。表9は、職業的不安と大学進路指導への要望との相関係数を示したものである。注目される結果を次に列挙する。

表9 職業的不安と大学進路指導への要望度との関連

		CG 1	CG 2	CG 3	CG 4	CG 5
全体 (N=460)	自己理解不安	.232**	.227**	.214**	.217**	.175**
	職業情報不安	.208**	.420**	.325**	.367**	.191**
	経験欠如不安	.152*	.294**	.224**	.256**	.172**
	相談欠如不安	.117	.196**	.155**	.235**	.086
	選択決定不安	.244**	.372**	.279**	.323**	.191**
	職業適応不安	.178**	.305**	.282**	.280**	.188**
	総 合	.220**	.355**	.289**	.328**	.196**
男子 (N=262)	自己理解不安	.294*	.253**	.230**	.219**	.185*
	職業情報不安	.251**	.431**	.329**	.345**	.212**
	経験欠如不安	.221**	.291**	.210**	.261**	.205**
	相談欠如不安	.177**	.235**	.210**	.276**	.162*
	選択決定不安	.281**	.394**	.293**	.320**	.219**
	職業適応不安	.204**	.339**	.284**	.309**	.208**
	総 合	.273**	.372**	.298**	.332**	.228**
女子 (N=198)	自己理解不安	.111	.117	.130	.178	.140
	職業情報不安	.118	.356**	.272**	.378**	.135
	経験欠如不安	.007	.250**	.205*	.214*	.092
	相談欠如不安	.009	.140	.063	.182	.001
	選択決定不安	.168	.280**	.201*	.295**	.122
	職業適応不安	.121	.165	.216*	.183	.129
	総 合	.108	.268**	.222*	.293**	.117

(注1) CG 1: 自己理解に役立つ検査やその指導  
 CG 2: 就職や進路に関する種々の情報提供  
 CG 3: 職業的経験に関する機会の提供  
 CG 4: 就職や進路に関するカウンセリング  
 CG 5: 人生設計や生き方に関する指導

(注2) \*\*  $p<.001$ , \*  $p<.01$



- ① 全体的傾向として、職業的不安と大学進路指導への要望度との間には、プラスの相関が認められる。すなわち、職業的不安が高いほど、大学進路指導への要望度も高い傾向が示されている。特に、「職業情報不安」と「選択決定不安」は、「就職や進路に関する種々の情報提供」、「就職や進路に関するカウンセリング」、「職業的経験に関する機会の提供」との関連が強くなっている。
- ② 男子では、すべての組合せにおいて有意なプラス相関が認められた。男子の場合には、職業的不安の内容は違っていても、当該不安が高いほど、大学進路指導（5項目）への要望度が高くなっている。
- ③ 女子は、男子と比較すると、有意な相関の数が少ない。女子の場合には、職業的不安の高い者は当然のことであるが、低い者であっても、大学進路指導への要望度が高いことを意味していると解釈される。

#### IV 全体の考察とまとめ

##### 1. 職業的不安尺度（OAS）の信頼性および妥当性について

大学生における職業的不安の内容と程度を測定するために、職業的不安尺度（OAS）が作成された。研究1では、OASについて、信頼性と妥当性の検討を行った。その結果は、次のように要約できる。

- ① OASの内的整合性を、項目水準および尺度水準で検討した結果、職業的不安を測定する下位尺度は、内的整合性の点で一貫した内容を備えており、信頼性の高い尺度あることが検証された。
- ② OASの安定性について、再検査法により検討した結果、高い安定性係数が得られ、1回目の平均得点・標準偏差と2回目のそれとがほぼ近似していた。この結果から、OASは、安定性の観点からも、信頼性の高い尺度であることが保証された。
- ③ OASの下位尺度間の関連性を検討した結果、全体、性別のいずれも、すべての組合せにおいて、有意なプラスの高い相関が認められた。

以上の検討結果を総合的に判断すると、「職業的不安尺度（OAS）」は、おおむね、信頼性と妥当性のある尺度であることが保証されたといえる。

##### 2. 職業的不安における性差・学年差について

大学生の職業的不安の一般的特徴について考察する。まず、全般的には、職業的不安は、性別で見ると、男子よりも女子の方に、そして学年では3年生において、より高いという傾向がみられる。なお、男子では、学年を通しての発達的変化のパターンが、自己理解不安、選択決定不安、職業適応不安の3つの領域において、3年生をピークとした逆V字型を示していた。

また、6領域のうち、不安得点の水準が高かった領域は、職業情報不安と選択決定不安の2つである。職業情報は、職業選択の根幹の1つであるだけに、これが不足していると認知した場合には不安感を喚起させ、さらに、この不安が選択決定不安にも大きな影響を及ぼしていると推察される。

### 3. 職業的不安と大学進路指導への要望との関連について

① 大学生が要望している進路指導の内容とその程度を調査した結果、「自己理解に役立つ検査やその指導」は、性・学年に関わりなく、要望度が高くなっていた。「就職や進路に関する種々の情報提供」は、3年生および女子の要望度が、相対的に高くなっていた。また、「就職や進路に関するカウンセリング」や「職業的経験に関する機会の提供」については、女子の要望度が高くなっていた。そして、「人生設計や生き方に関する指導」は、男子では学年差はなかったが、女子では、1・2年生と4年生の要望度が高く、3年生の要望度が低いという、V字型の変化を示していた。この原因として考えられることは、3年女子が就職問題という一時点に関心が集中し、キャリア（生涯進路）という長い線でもとらえる視点がやや欠落した心理状態にあるように推察される。

以上の結果を総合化して考えると、大学生の多くは、高等教育段階での進路指導を積極的に望んでいるといえよう。また、この結果は、大学生が単なる職業紹介的なサービスだけでなく、本来的な教育としての進路指導を要望していることを示唆していると解釈される。

② 職業的不安が、大学進路指導への要望度とどのような関係にあるのかを分析した結果、かなり明確な関連がみられた。すなわち、全般的傾向として、職業的不安が高いほど、大学進路指導への要望度が高くなっていた。とりわけ、「職業情報不安」と「選択決定不安」は、進路指導の内容（項目）のうち、「就職や進路に関する種々の情報提供」、「就職や進路に関するカウンセリング」、「職業的経験に関する機会の提供」と密接な関連が認められた。性別に着目すると、男子では、すべての組合せにおいて有意なプラス相関が確認された。男子の場合には、職業的不安の内容は違っていても、当該不安が高いほど、大学進路指導への要望度が高くなっている。一方、女子は、男子と比較すると、有意な相関の数は相対的に少なくなっていた。これについては、職業的不安の低い女子学生の場合であっても、大学進路指導への要望度が高いことに起因していると考えられる。

以上の結果をまとめると、職業的不安が高く、そのために進路指導的介入を求めている大学生がかなり多いものと推察される。大学生自身が当面の職業的不安と正面から取り組む自律的態度が必要であるけれども、このことは大学組織にとっても看過できない問題であるといえる。日本労働研究機構（1992）の行った大学就職指導に関する調査によれば、ガイダンス・進路希望調査などの指導は、多くの大学で実施しているが、企業・業界説明会、個別相談は実施大学が少なく、特に国立大学では低調になっている。高等教育段階における進路指導のあり方としては、単なる就職斡旋といったサービス活動ではなく、学生の実態を十分に把握したうえで、学生サイドに立った進路指導をいかに実践していくかが重要であろう。

### 4. 今後の課題について

今後は、OASの基準関連妥当性の検証にもなるが、職業的不安とキャリア成熟との関連や、学生生活での適応との関連について、検討をしていく予定である。

また、本研究では、職業的不安の発達の（学年）変化について、横断的データを用いて分析したが、これは対象選択の仕方によって結果が異なる可能性も考えられる（Vondracek et al.,1986）。し

たがって、職業的不安の発達的变化や形成過程を明らかにするためには、今後縦断的な研究方法を導入していくことが要請される。

## 引用・参考文献

- 有本章・近藤大生（編） 1991, 現代の職業と教育 — 職業指導論 福村出版
- Crites, J.O. 1969, *Vocational psychology*. McGraw-Hill.
- 古市裕一 1995, 現代青年における職業忌避的傾向 — 規定要因の検討と類型化の試み 悠峰職業科学研究紀要第3巻 57-65.
- 堀洋道・山本真理子・松井豊（編） 1994, 心理尺度ファイル — 人間と社会を測る 垣内出版
- 日本労働研究機構 1992, 大学就職指導と大卒者の初期キャリア(1) 調査研究報告書No.33.
- 坂柳恒夫 1993, 高校生の進路成熟に関する縦断的研究 愛知教育大学教科教育センター研究報告第17号, 127-136.
- 坂柳恒夫・後藤正樹 1995, 大学生の職業知識 愛知教育大学研究報告第44輯, 217-228.
- 清水和秋 1983, 職業的意思決定と不決断 関西大学社会学部紀要第14巻(2), 203-222.
- 清水和秋 1989 中学生を対象とした進路不決断尺度の因子的不変性について — COSAN を使用して 関西大学社会学部紀要第21巻(1), 143-176.
- 下山晴彦 1985 来談者の職業未決定について — 個人面接の観点から 東京大学学生相談所紀要 4, 21-30.
- 下山晴彦 1986, 大学生の職業的未決定の研究 教育心理学研究第34巻, 20-30.
- 曾我祥子 1993, 不安のアセスメント 上里一郎（監修） 心理アセスメントハンドブック 西村書店 339-359.
- 都留春夫 1981, 不安 藤永保・他（編） 新版心理学事典 平凡社 740.
- Vondracek, F.W., Lerner, R.M. & Schulenberg, J.E. 1986 *Career Development : a lifespan developmental approach*. Hillsdale, N.J. : Erlbaum.
- 吉谷二郎 1990 生涯にわたるキャリア形成と職業指導 雇用問題研究会

# A Study on Occupational Anxiety in University Students

Tsuneo SAKAYANAGI\*

The Purposes of the present study are to construct an Occupational Anxiety Scale (OAS), to investigate gender differences and grade differences of students' occupational anxiety, and to examine the relationship between occupational anxiety and needs for career guidance & counseling in higher education.

Occupational anxiety is assumed to consist of six domains (self-understanding, career / occupational information, lack of work-related experience, lack of career counseling, career decision-making, and career adjustment), which are identified as important and fundamental domains in career guidance & counseling. The subjects of this research were 460 university students (262 males and 198 females) in total. In order to make a new scale for occupational anxiety which includes all six subscales, a number of items were gathered, then 30 items were selected.

In Study 1, both reliability and validity of the Occupational Anxiety Scale were examined. All subscales provided acceptable levels of internal consistency, and the reliability (stability) based on test-retest over a 3-week interval was established. The intercorrelation coefficients of the subscales were satisfactorily high; in particular, the subscale score for career / occupational information anxiety was highly correlated with that for career decision-making.

The purposes of Study 2 were to make clear gender differences and grade differences in occupational anxiety, and to investigate the relationship between occupational anxiety and needs for career guidance & counseling in higher education. The main results fall into two groups.

(1) Using the ANOVA test on the six occupational anxiety scales independently, it was found that gender differences and grade differences were significant. Female subjects generally indicated higher scores than male subjects in their anxiety on the six domains. Also, third-grade subjects indicated higher scores than last-grade subjects in their anxiety. Significantly, gender differences in the last grade differed from those in other grades.

(2) Students' occupational anxiety was closely associated with their needs for career guidance & counseling. In particular, male students' anxiety had more positive correlation with their needs for career guidance, than that of female students.

Findings from these studies suggest the importance of career guidance & counseling

---

\* Associate Professor, Aichi University of Education (Affiliated Researcher, R.I.H.E.)

corresponding to the students' psychological states of occupational anxiety. Hence it was indicated that career guidance & counseling in higher education should be based on students' actual condition and needs, rather than the placement service itself.

